



第 13 回

堤防づくりに“心”の土を

・熊沢蕃山

作家 童門冬二

熊沢蕃山(くまざわ・ばんざん)は、近江(滋賀県)出身の学者武士だった。近江聖人といわれた中江藤樹に学んだ。藤樹は“心学”を唱え、武士だけでなく一般の商人や漁民や農民にも教えた。藤樹の教えをわかり易くいえば、

- ・人間はだれでも心の中に一枚の鏡を持っている
- ・この鏡が曇っていなければ、世の中のできごとや人の心の悲しさや苦しさがすべて映る
- ・映し撮った人間は、相手のきもちになってその悲しみや苦しみをいっしょに解決するように努力すべきだ
- ・それなのに、鏡になにも映らず、自分のことばかり考えているのは鏡が曇っているからだ
- ・鏡を曇らせるのは自分の欲望や私利を願うきもちだ。これを拭き取って、心の鏡はいつもピカピカに輝かせておかなければならない

藤樹の塾に学ぶ人びとは、この教えを守った。蕃山もそのひとりである。

蕃山はその学問や考え方を認められて、備前(岡山県)岡山藩主池田光政に召し出された。とんとん拍子に出世し、やがては藩政を任された。

拠点である岡山城は、瀬戸内海に面し同時に北から流れこむ旭川のほとりにあった。そのため、時期によっては海から波が押し寄せたり、あるいは川が氾濫して洪水に襲われる。そのため、城下町には頑丈な堤防が必要になった。藩主の池田光

政はその造成を蕃山に命じた。蕃山は机の上の学問だけではなく、土木関係にも知識と技術があったからである。

蕃山は考えた。それは、

「ただ土を盛って堤防をつくっただけでは意味がない。その堤防に、つくる人間の心がこもっていないなければならない」

ということだ。つまり中江藤樹から教えられたことを堤防づくりに生かそうと考えたのである。

そこで、蕃山は特別な工法を考え出した。

- ・まず、働く人びとに土を盛らせる
- ・そして、これを踏み固める
- ・ふつうなら、その上に石をおいて堤防づくりをすればよいのだが、蕃山はそうしなかった

かれは、

- ・踏み固めた土の諸所に穴を開け、働く人びとに掘らせる。その土をモッコに入れて違う穴に運ぶ

- ・そして運んだ土を穴に埋め、また踏み固める
- ・これを繰り返す

という方法であった。実際にこれをおこなってみると、働く人びとたちから文句が出た。

「熊沢さん、なぜこんなことをするのですか?」かれらにすれば、一旦踏み固めたら、その上に石をおいて堤をつくれればいいではないか、という考えだ。それなのに蕃山はせっかく踏み固めたところを、

「もう一度掘り返せ」という。それだけでなく、

「掘った土を運んで、ほかの掘られた穴に持って
いって埋めろ」

という。働く人びとたちにとっては、二重手間
でありムダなことばかりさせると感じたのだ。ま
わりからみたら、おそらく、

「あの人たちはいったいなにをやっているのだ
ろう?」

と疑問を持たれ、挙句の果ては笑われてしまう。
働く人たちはそういう不満を持った。しかし蕃山
はこう説明した。

「一旦踏み固め場所をまた掘り返し、その土を
別なところに運ぶのはたしかにムダだと思えるだ
ろう。が、違うのだ」

なぜ違うかといえば、蕃山は、

「この堤防は、働くおまえたちの心をこめて欲
しいからだ」

といった。しかしそんな説明で働く人びとたち
は納得できない。第一蕃山のいっていることがど
ういうことなのか理解できない。蕃山にすれば、
一旦踏み固めた土を掘り返し、掘り返すという作
業を、堤防全体にわたっておこなわせる。そうす
ることによって、働く人びとたちの胸に疑問がわ
く。

「こんなことをして、いったいなんの役にたつ
のだろうか?」

というものだ。蕃山はその疑問を大切に思った。
そして、

「その疑問を克服し、なんためかという理解を
することが大事なのだ。そのことが、堤防をより
強固にし、土を強くする」

と考えていたのである。蕃山がどこでこんなや
り方をおぼえたのかはわからない。しかし、盛り
土の上を働く人びとを何度も往復させて、踏み固
める作業を繰り返せば、盛られた土は引き締まっ
て強くなる。蕃山はしかしそれだけで満足しなか
った。踏み固めた土をもう一度掘らせるというこ
とは、考えようによっては、

「いままでの努力を全部ムダにする」

と疑わせる。しかしそれは違った。踏み固めた
土をもう一度掘り返し、穴をあちこちにつくる。

そして掘った土をモッコに入れて違う個所の穴
に埋めて踏み固める。これを繰り返していれば、
堤防はどんどん強く固まっていく。その過程で蕃
山は、

「土の塊ひとつひとつに、働く人びとの心をこ
めて欲しい。心というのは、この土を盛り固める
ことによって波や洪水を防ぎ、住む人びとを安心
させるというきもちなのだ」

と思っていた。何度も繰り返して説明する蕃山の
話に、働く人びともしだいに理解を深めた。なに
よりも熱っぽく説く蕃山の眼の輝きは、決して私
利私欲をはかるものではなく、あくまでも、

「岡山に住む人びとを守ろう」

という誠心にあふれていたからである。この奇
妙な工法によって堤防は完成した。

明治になって、堤防が本格的なコンクリートの
ものに変えられることになった。このとき、古い
堤防をみた技術者たちは、蕃山のやった工法の不
思議さに感心した。

「土の堤防がここまで固く盛られたのには、な
にか秘密があったのにちがいない。いったい、ど
ういう工法をとったのだろうか?」

と口々に話し合った。古いことを知る人から蕃
山のやり方をきいて、技術者たちは感心した。

「なるほど、土のひと塊ずつに、運ぶ人が真心
をこめたということですね。これは勉強になる」

とうなずき合った。だから眼の前にある古い堤
防がそっくりそのまま、そのときに土を運んだ人
たちの真心の山にみえたのである。